

## あとがき

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団  
障害者スポーツに関する調査研究委員会・委員長  
海老原 修

2011年8月開催の世界陸上で両足義足のピストリウス（南アフリカ）が男子400mで準決勝にまで進出した。パラリンピアンがいよいよオリンピックに出場するかもしれないと期待させる刺戟的な事件であった。科学技術の発展にともなって障害者の可能性は広がるが、拡大するほどにオリンピックはもとよりスポーツの身体資源には完全な平等は保障されないという本質が浮かび上がる。平等を追求すれば実際の競争が成り立たず、スポーツの卓越性を目指すほど平等の基準が曖昧になるという矛盾は従前より予見されていた。

この背後には障害者＝もたざる者と健常者＝もてる者という構図がある。先天的であろうが中途障害であろうが、生来の膝をもつ者、膝をもつが下腿のない者、膝も下肢のない者の間にいかなる違いがあるのだろうか。これを打破するには、あるという存在の前ではもつ／できるという思考に意味がないと理解したい。何かできない者＝障害者ならば、あらゆる人間がどのような程度かできないこと＝障害があるはずだ。ゆえに、その障害によって参画が拒まれる者すべてを障害者だと云って不都合はない。能力による差別はすべて障害者差別であると云っていいのだ、と発問してみたい。もっているからできる。ならば、もっていないからできない、となんら変わらない。どちらにしろ、できないのだから、もっていたって、いなくなっても、なんら変わらない。もつ価値にある価値を対置させ、もつ／もたない、できる／できないといった所有や能力は存在の価値に何ら関係しないのだ。

2014年3月8日サッカーJ1浦和レッズ・埼玉スタジアムに横断幕「Japanese Only」が掲げられた。「日本人のみ」ではなく「外国人お断り」と理解するのは、「Don't be afraid」を「怖がらないで」ではなく「思いっきりやりなさい」と訳す手順にならう。微妙なニュアンスは反義・反意が鮮明とする。とまれ、それではオリンピックはいかなるメッセージを横断幕に掲げているのか。「障害者お断り」ではあるまい。障害者に健常者が到底勝てそうにないスポーツのやり方があるかしらん。そのような荒唐無稽な想像を巡らせば、健常者の優位性を顕在化する仕掛けがスポーツに組み込まれているに過ぎないとたどりつこうか。スポーツの成り立ちを改めて問うチャンスはすなわち、健常者と障害者が同じ地平に立つそれとなる。

折しも朝日新聞（2015年2月28日）は「ひと欄」にスキーで五輪とパラリンピックの両代表を夢見る川除大輝（かわよけ・だいき）さん（14歳）を紹介する。生来、両手足の人さし指と中指がなく、その握力は右手16キロ、左手9キロ。青森県で開催されたクロスカントリースキー全国中学校大会に健常者に交じって富山県代表として出場し、北海道での障害者ノルディックW杯にも初参加すると云う。彼のロールモデル、2010年バンクーバーパラリンピック大会・金メダリスト、新田佳浩選手に憧れ、競技を続けてきた。将来の夢はオリンピックとパラリンピック両大会の代表選手。健常者と障害者がスポーツで同じ地平に立つ可能性を刺激してくれそうだ。本報告もまた、スポーツにおける平等とはなにか、との反芻を通じて、健常者と障害者の関係を論議する一端を担っていると確信する。